

研究ノート

ルーシの石貨（紡輪）について

On Russian Stone Money (Spindle Whorls)

安木 新一郎

YASUKI Shinichiro

抄録

モンゴル帝国支配以前のルーシ（現在のウクライナ中西部、ベラルーシ、ロシア中央部および北西部）では、ウクライナ北部オヴルチ産の凝灰質粘板岩製紡輪が石貨として流通していた。13世紀後半になると石貨はなくなった。モンゴル支配下のルーシでは銀と貝貨が使用されており、貝貨が安定的に供給されるようになり、石貨は流通しなくなったと考えられる。良貨である貝貨が悪貨である石貨を駆逐したという、グレシャムの法則の逆の現象が起きたのであろう。

キーワード

モンゴル、キプチャク・ハン国、ロシア、貨幣、グレシャムの法則

1 はじめに

現在のウクライナ中西部、ロシア中央部と北西部、ベラルーシにあたる地域はかつてルーシと呼ばれていた。9世紀にルス族というヴァイキングの一派が侵入しルーシ・カガン国ができたが、ルーシとはルス族のことである。

ルーシでは銀地金やイスラム銀貨、クロテンやリスの毛皮が貨幣とされた。11世紀になるとルーシではビザンツ帝国の金貨や銀貨をまねて造幣をおこなったが少量にとどまり、引き続きイスラム銀貨や西欧の銀貨をそのまま使うか、半分に切って使われた。

12世紀から14世紀前半までルーシでは独自硬貨は作られなかったため、この期間は「無硬貨期」と呼ばれている。無硬貨期は前半と後半に分けることができる。

1236年～1241年にモンゴル軍はルーシに侵攻し、最終的にルーシはジョチ朝（キプチャク・ハン国）に服属した。モンゴル支配より前のルーシでは、グリヴナという量目160グラム弱の棒状の銀塊¹、クナ（クロテンの毛皮）、ノガタ（良貨を意味する名詞。アラビア語からの借用語）、レザナ（切断を意味する名詞）、ヴェクシャ・ヴェヴェリツァ（リスの毛皮）などといった単位の銀粒が貨幣とされた。

また、木綿、ガラス玉、カーネリアン（瑪瑙）、貝貨（キイロダカラの貝殻）、革製貨幣（革幣）などが使われた。こうした多種多様な貨幣の一つとして石貨 stone money がある。

モンゴル支配下のルーシではガラス玉、カーネリアン、石貨が貨幣としては用いられなくなり、おもに貝貨が小額貨幣として流通したと考えられる。

ルーシの石貨についてはローゼンフェルドが遺物から貨幣であると論じ²、スパスキー³、フョドロフ・ダヴィドフ⁴、プロホロヴァ⁵らにその認識が継承され、改めてヤーニン⁶が実在を主張した。これに対して、リャブツェヴィッチは少なくとも現在のベラルーシで石貨として流通したという点に疑問を呈している⁷。

本稿では、ウクライナのオヴルチ Овруч（史料ではヴルチイ Вручий と書かれることが多い）で生産された凝灰質粘岩製紡輪は石貨であり、モンゴル統治下で貝貨が安定供給されるようになったことで石貨は消滅した、という仮説を提示

する。

2 オヴルチの紡輪

ルーシの石貨は、糸をつむぐのに用いた器具である紡輪 spindle whorl の形をしている。出土する紡輪は直径 10～25 ミリの円盤状で、中央に 6～10 ミリの丸い孔があいている。高さは 4～12 ミリ程度である。五円玉が直径 22 ミリ、孔径が 5 ミリで、紡輪の孔は五円玉に比べ大きい。

地域も時代も異なるが、中世の一乗谷朝倉氏遺跡で出土した鉄製紡輪の直径は 42 ミリである⁸。日本の古代の紡輪も 30～50 ミリあり、ルーシの紡輪は日本のものに比べ小さめである。

ルーシの紡輪には粘土製や鉛製のものもあれば、凝灰質粘板岩製のものもある。石貨とされたのは、ウクライナ北部、ベラルーシ国境近くのおヴルチで採掘される粘板岩で作られたものに限られる。オヴルチはヴォルィニ公国の一部だったので、オヴルチの紡輪はヴォルィニの紡輪とも呼ばれる。

粘板岩はスレート劈開性をもち、薄板として採石しやすく、また割れた表面に凹凸が少ない。例えば、日本で基石などに使われる那智黒石は黒色粘板岩である⁹。

オヴルチ産の粘板岩はピンク色あるいは赤味を帯びており、このような色の粘板岩は欧州ではオヴルチの位置するウジ河とウボルチ河周辺でしか採石されない。オヴルチでは 9～13 世紀前半まで紡輪が作られたと考えられる¹⁰。

オヴルチの紡輪が石貨だとされる根拠はその出土状況にある。モスクワ市中心部の 12～13 世紀の遺跡¹¹やプスコフでは、オヴルチの紡輪が銀やガラス玉の腕輪や首飾り、貝貨など、他の貨幣と一緒に出土する。ヤーニンは、一か所から数百個のオヴルチの紡輪が見つかることから紡輪としてためられていた物ではなく、また一括出土する紡輪の範囲がルーシの領域に一致することから、オヴルチの紡輪はルーシの石貨であると主張した¹²。

ただし、オヴルチの紡輪はルーシ以外にも、クリミア、ヴォルガ・ブルガル、モルドヴィア、リューベックなどでも見つかっている。おそらくルーシの外では石貨ではなく紡輪として使われていたのであろう。

リャブツェヴィッチはオヴルチの紡輪を石貨と見ることに懐疑的であるが、ベラルーシ北部の一括出土紡輪などの分析から、重さが約 16 グラムなのは古代ルーシの度量衡にしたがったものだと考えている¹³。オヴルチの紡輪の重さが統一されていたのであれば、材質が同じなので、必然的に直径、孔径、厚さが画一化されていたことになる。

オヴルチには 12～13 世紀に粘板岩の薄板を積み上げた壁を持つ大きな教会が建てられ、また農耕が盛んな土地ではなかったことから¹⁴、石貨生産地として栄えていたことがわかる。

3 ヤップ島の石貨との共通性

石貨として有名なものに、ミクロネシア・ヤップ島のライがある。ライは直径 60 センチ～1 メートル、大きいものでは直径 3 メートル、重さ 5 トンに及ぶものもある。石貨はヤップ島から 500 キロ離れたパラオの鍾乳石を材料としてパラオで成形され、ヤップ島に運ばれた。ライはカヌーの建造の謝礼や儀礼の交換財など、さまざまな目的で使われた¹⁵。形は円形で、真ん中に孔が開けられ、孔に丸太を差し込んで担いで運んでいた¹⁶。

巨大なライの場合、所有権が移ってもライを物理的に移動させることはあまりない。また、ライに文字や印を入れることもあるが、基本的にはそのライが誰のものかは明示されず、その集団内で共通認識とされた。極端な場合、パラオから運んでくる途中に沈んでしまったライですら、島民は海中のライの存在と所有権を認めている¹⁷。

オヴルチの紡輪は、ライと同じく、特定の産地の石材が原料となっている。また、出土例は少ないが、所有者などの情報が刻まれることがある。例えば、「公の娘が持っている княжо естъ」と刻まれた紡輪が見つかっている¹⁸。

リューベックで見つかったオヴルチの紡輪にはアルファベットが刻まれているが¹⁹、ルーシ域外では貨幣ではなく紡輪として使われていたので、所有者の情報が刻まれたのだろう。

4 おわりに

オヴルチの紡輪の生産は、13世紀前半に突然終了し、ルーシでは粘土製や鉛製などの紡輪が各地で生産され使用された。

ロシア語圏では、モンゴル軍がオヴルチに侵攻して職人を殺し、工房が破壊されたことで、石貨は消滅したというのが定説化されている²⁰。

しかしながら、1238年から行われたモンゴルによるルーシ・ハンガリー侵攻は、キプチャク部族4万帳を率いるクテン追討作戦であり、オヴルチを含む作戦地域の破壊や征服を目的としたものではなかった。オヴルチは歴史から消えることなく、ハリチ・ヴォルニニ大公国、その後はリトアニア大公国に属する都市として存続し、現存している。

仮にモンゴル軍がオヴルチの紡輪工房を破壊し職人を虐殺したとしても、ルーシでオヴルチの石貨が消滅した要因になるとは思えない。もし需要があれば工房は復活したであろう。ただの紡輪であれば粘土製や鉛製で十分であり、オヴルチ産である必要はない。この事実そのものが、モンゴル征服より前のルーシにおいて、オヴルチの紡輪が石貨であった証拠である。

モンゴル征服後もルーシでは小額貨幣として貝貨が流通したと考えられている。貝貨はインド洋モルディヴ諸島周辺やフィリピンのスルー諸島で採れるキイロダカラの貝殻で、モンゴル帝国ではルーシの他に雲南で流通した。

元朝は河川に関所を設けて雲南への貝貨供給量を管理し、貝貨で徴税をおこない、兵に対し支度金を貝貨で支払うなど、行財政および軍事に貝貨を活用した²¹。おそらくジョチ朝もルーシやシベリアに貝貨を供給することで毛皮や兵員などを得ていたと思われる。

ルーシがモンゴル帝国の一部となったことで、貝貨が安定して供給されるようになると、「良貨が悪貨を駆逐する」、すなわちグレシャムの法則と逆の現象が起きたのであろう²²。

貨幣となる物の特徴は、所有権が移譲可能であると同時に、その物自体には所有者の名が明示されないという点である。古代ギリシャ・ローマの伝統を受け継ぐイスラム圏や欧州では硬貨や紙幣に国王の肖像が描かれることが多いが、この場合、硬貨や紙幣の所有権が国王に固着しているわけではない。裏書ができる手

形には支払完了性がなく、貨幣とは言えない。

金属硬貨や貝貨に新たな文字や印を付け加えることは、不可能ではないが困難である。これに対して、すでに見たように、オヴルチの紡輪には文字や印が刻まれるという形で所有者が明示される場合があった。いったん刻まれると、オヴルチの紡輪は一般的交換手段としての機能を失って、石貨から紡輪に戻るのである。小さな石であるため、裏書もできず、手形にもなりえない。

貝貨には貨幣としての使用価値しかない、言い換えると、貨幣以外の使い道がないが、オヴルチの紡輪には紡輪としての使用価値が備わっている。貝貨に比べ石貨は貨幣として不完全であると言えるだろう。

無硬貨期のルーシではさまざまな物品貨幣が流通していたが、モンゴル支配下では銀、貝貨、木綿、革幣などに収斂していく。14世紀中頃にモンゴル帝国が衰退すると、貝貨の供給が滞り、ルーシでは独自硬貨として銀貨、銅貨および革幣が発行され、また、ジョチ朝の銀貨が流通することになる。

図 オヴルチの紡輪



出所) モスクワ市長公式サイト

(<https://www.mos.ru/news/item/88868073/>)。

注

-
- ¹ ロシアではグリヴナの重さは 130～160 グラムと書かれることが多いが、不正確である。ペゴロティの『商業指南』では、1 アスプル（アクチェ）銀貨（重さ 0.78 グラム、銀純度 96.5 パーセント）202 枚が 1 ソンモ（グリヴナ）と記録されている。したがって、1 グリヴナは約 158 グラムである。詳細は、安木新一郎（2021）「大モンゴルの小額貨幣：ジョチ朝（キプチャク＝ハン国）における銀貨・銅貨交換比率について」、岩橋勝編著（2021）『貨幣の統合と多様性のダイナミズム』、晃洋書房。
- ² Розенфельдт Р. Л. (1964) О производстве и датировке овручских пряслиц, *СА*. № 4.
- ³ Спасский, И. Г. (1970) *Русская монетная система*, (<http://www.arcamax.ru/books/spassky01/spassky23.htm>) (最終閲覧日：2019 年 4 月 5 日) .
- ⁴ Фёдоров-Давыдов, Г. А. (1985) *Монеты-свидетели прошлого*, М.
- ⁵ Прохорова, Н.В. (2007) *Монеты и банкноты России*, ООО Дом Славянской Книги.
- ⁶ Янин В. Л. (2009) *Денежно-весовые системы домонгольской Руси и очерки истории денежной системы средневекового Новгорода*. М. : Языки славянских культур.
- ⁷ Рябцевич, В.Н. (1977) *О чем рассказывают монеты* (https://web.archive.org/web/20111025115131/http://www.bighobby.ru/articles/art_bezmon.html) .
- ⁸ 織田悠希・東村純子 (2018) 「博物館における紡績資料の活用：紡錘の考古学的研究に基づいて」『福井大学教育地域科学部博物館学研究室』、5、2018 年 3 月、65 頁。
- ⁹ 那智黒石については、小村良二 (2005) 「近畿の石材（切石）—那智黒石」『地質ニュース』、609、2005 年 5 月、を参照。
- ¹⁰ ヴォルガ・ブルガル国の遺跡から 9 世紀頃のオブリチの紡輪が見つかることから、オブリチにおける紡輪生産は 9 世紀までさかのぼる。ヴォルガ・ブルガル国に関しては、イブン・ファドラーン（家島彦一訳注）(2009) 『ヴォルガ・ブルガール旅行記』、東洋文庫 789、平凡社を参照。
- ¹¹ モスクワ市長公式サイト (<https://www.mos.ru/news/item/88868073/>) (ロシア語)。
- ¹² Янин (2009) .
- ¹³ Рябцевич (1977) .
- ¹⁴ Тихомиров М.Н. (1956) *Древнерусские города*, Москва: Государственное издательство Политической литературы (<http://historic.ru/books/item/f00/s00/z0000082/st006.shtml>) .
- ¹⁵ 国立民族学博物館ホームページ (<https://older.minpaku.ac.jp/museum/exhibition/main/oceania/03>)。

-
- 16 小林繁樹 (2005) 「世界最大の貨幣」、印東道子編著 (2005) 『ミクロネシアを知るための58章』、明石書店、175頁。
- 17 フリードマン、M. (1993) 『貨幣の悪戯』、三田出版会。
- 18 Тихомиров (1956) .
- 19 Розенфельдт (1964) .
- 20 モンゴル軍によってオヴルチの紡輪の工房が破壊されたということを証明した論考は見当たらない。
- 21 安木新一郎 (2012) 「13世紀後半モンゴル帝国領雲南における貨幣システム」『国際研究論叢』、25(2)。
- 22 中国明代に逆グレシャムの法則の例がある。黒田明伸 (2020) 『貨幣システムの世界史』、岩波現代文庫。